

無抵抗の座り込み

「命身にかきいてい 村を守る

恩納村民の たたかい」

〈都市型戦闘訓練施設完全撤去から30年〉

恩納村を揺るがし、村民の生活に重大な影響を及ぼした都市型戦闘訓練施設建設反対のたたかいから30年あまりがたちました。戦争につながる軍事施設を拒否し、反対の声をあげ続けた村民のたたかいを、復帰50年の今年、あらためて振り返ります。

◆都市型戦闘訓練施設とは

1980年代、米国は海外での自らの利益を守るために、その国で起こる軍事・政治的紛争を鎮圧するためのテロやゲリラ戦―「低強度紛争」を軍事戦略に位置付けていました。その作戦を実行するのが「悪魔の部隊」と称される米陸軍特殊作戦部隊グリーンベレーです。この部隊は復帰までは宜野座村松田に駐留し、一旦撤収しましたが、1984年に読谷村のトリイ通信施設に再配備されました。

◆立ち上がる村民

1988年7月、不可解な構造物を恩納区長(当時)が発見します。それがゲリラ戦の訓練をする施設であることを後の新聞報道で村民は初めて知り、建設工事反対の声をあげるようになりました。

同年12月18日、「都市型戦闘訓練施設建設反対の区民総決起大会」が開催され、反対運動が動き始めます。また比嘉茂政村長(当時)を委員長とした村内10団体による「特殊部隊訓練場建設及び実弾射撃演習反



対恩納村実行委員会」(実行委員会)も結成され、12月27日には村民総決起大会を開催します。実行委員会は那覇防衛施設局へ、建設の即時中止を要請しますが、「安全対策はできている」という返事に終始するのみでした。村民の切なる要請にも関わらず、何も状況が変わらない中、南恩納、恩納、太田、瀬良垣の4区長は実力阻止を村長に要請し、実力阻止行動が始まります。

また激化する実弾射撃訓練を実施する米兵を乗せた車両の演習場内への出入りを監視するために、朝7時から進入道路(農協集荷場近く)で待機を開始しました。また監視小屋を置き、その屋上にサイレンも設置し長期のたたかいにそなえました。村民はそれぞれの生活や仕事の都合を工面し、昼夜交替で監視の当番を組む、エイサー練習も監視小屋のそばで行われました。

◆非暴力、無抵抗の座り込み

建設を阻止するため、米軍車両が進入路に接近すると監視団がサイレンを鳴らし、区民が現場に駆け付け、無抵抗で座り込み、米軍と対峙しました。こうした村民の粘り強い座り込みに対して、米軍は日本の警察に排除の要請をします。この要請に応えた石川警察署から機動隊が出動し、座り込みの村民を排除することになりました。広報おんなにも当時の様子が記されています。

午前6時

まずうす暗いもやの中に真っ黒くそびえ立つ恩納岳のふもとで、突然けたたましいサイレンが響きわたりました。